

ISSN 0388-4279

国際関係学部研究年報

第 40 集

2 0 1 9

日本大学国際関係学部

国際関係学部研究年報

第 40 集

2 0 1 9

日 本 大 学 国 際 関 係 学 部

国際関係学部研究年報第40集

目 次

論 文

土岐善麿と中国の文学者との交流について 小 田 切 文 洋 … 1

金子文子の形象化をめぐる

—瀬戸内晴美『余白の春』論— 安 元 隆 子 … 11

CONTENTS

About exchanges between Toki Zenmaro and Chinese literary men	Fumihiko OTAGIRI ...	1
Review of giving the form of Kaneko Fumiko		
— A study on Setouchi Harumi 's "Yohaku no haru"—	Takako YASUMOTO ...	11

土岐善麿と中国の文学者との交流について

小田切 文洋 ^{*1}

About exchanges between Toki Zenmaro and Chinese literary men

Fumihiko OTAGIRI ^{*1}

In this paper, I will examine the exchanges between Toki Zenmaro and three Chinese literary men, Feng Zhi (馮至), Li Mang (李芒) and Guo Moruo (郭沫若). Toki Zenmaro, through exchanges with these Chinese literary men, deepened the understanding of China and Chinese literature. In this paper, I will try to survey the art works and researches of Toki Zenmaro, focusing on his creative activities.

1925 年に漢詩と訳集『UGUISU no TAMAGO』を出版して以来、土岐善麿は生涯にわたって中国古典文学に関心を持ち続けてきた。なかでも関心の中心にあったのは杜甫である。杜甫の探求を進める中で、現代中国の文学者との新たな機縁も生まれている。土岐善麿は、1960 年、1964 年、1973 年と三度、訪中団団長として新中国を訪れている。訪問の性格はそれぞれに違うが、訪問のたびに中国の文学者たちとの交流を深めている。本稿では、馮至、歐陽予倩、李芒、郭沫若ら中国の文学者との交流について資料を整理していきたい。

一

土岐善麿は 69 歳になった 1954 年から、嵯峨寛や真田但馬らとともに「杜甫を読む会」を始めている。若い人たちと輪読を進めながら、解釈の基礎となる訳稿がまとめられていった。最初の成果として出されたのは、翌年の 11 月に刊行された『新訳杜甫詩選』(春秋社)である。この後『新訳杜甫詩選』の書名で第四まで刊行されていく。それら四冊を再編集して『新訳杜甫』(光風社書店)が刊行されたのは、85 歳になった 1970 年である。「杜

甫を読みひそかに思ふ 人間が詩をつくることの意義とちからを」「石」『額田抄』(初音書房、1960 年 12 月)、「一千年 たがい時に隔てたる大陸の詩人と いまともにあり」「斜面荘近事」『十方抄』(短歌新聞社、1971 年 1 月)などの作からも土岐善麿が杜甫へ深い共感と関心を持ち続けていたことが知られる。土岐善麿の杜甫研究が素人的な関心に終わらなかったことは、清代までの注釈や詩論ばかりでなく、新中国になってからの新しい杜甫研究にも目が向けられていたことから理解される。

吳中勝『杜甫批評史』(中国社会科学出版社、2012 年 4 月、中国語の文献は原書・原文の表記に従う)によれば、新中国成立後の杜甫批評を代表するのが、馮至『杜甫傳』(人民文学出版社、1952 年 11 月)と郭沫若『李白と杜甫』(人文学出版社、1971 年 10 月)である。この二冊は、一方が建国期の 50 年代、もう一方が文革期の 70 年代とそれぞれの時期の政治状況を反映していて対照的な性格となっている。馮至が杜甫の人民性・現実性を肯定的に描いているのに対して、郭沫若は杜甫の階級意識や地主生活など封建思想を剔抉し、人民詩人としての杜甫を否定している。

*1 日本大学国際関係学部国際教養学科 教授 Professor, Department of Liberal Arts, College of International Relations, Nihon University

1950年代には、蕭滌非『杜甫研究』（山東人民出版社，1956年6月）、傅庚生『杜甫詩論』（上海文藝聯合出版社，1954年12月）など杜甫研究の重要な著作が出版されているが、その中でも注目されたのは馮至の『杜甫伝』である。馮至（本名は、馮承植）は、『北遊』1929年、『十四行詩』1942年などの文学的香気の高い詩集で知られる、中国近代詩の重要な詩人である（詩人馮至については、秋吉久紀訳編『馮至詩集』土曜美術社，1989年11月や佐藤普美子『彼此往来の詩学—馮至と中国現代詩学』汲古書院，2011年2月などの研究・翻訳がある）。馮至が杜甫伝を書いた動機は、「這部傳記的目的是我們祖国第八世紀一個偉大的詩人介紹給讀者，讓他和我們接近，讓我們認識他的時代裏是怎樣生活、怎樣奮鬥、怎樣發展、怎樣制作，並且在他的作品裏反映了些什麼事物。」（前掲『杜甫傳』，1頁）という前書きの一文に明らかである。杜甫がどのように生活し奮闘したのか、またどのように発展し制作していったのか、その作品のうちにはどのような事物が反映されているのかを現代の読者に身近なものとするために書かれたのである（杜甫研究史における、馮至の研究の位置づけについては、張迎勝《馮至先生的杜甫研究》，《杜甫研究學刊》2001年第3期・趙睿才《華路藍縷，以啟山林—馮至先生的杜甫研究》，《杜甫研究學刊》2006年第3期などの論がある）。

土岐善麿が馮至の著作に早くから注目していたことは、前述の『新訳杜甫詩選』の中で、「杜甫一代の名作とされ」た「秋興八首」の「昔と今と、中国における評価の変遷を考えるうえから参考になる」として、馮至の新説をかなり長く引いていることから分かる（136～137頁）。1957年12月に刊行された『新訳杜甫詩選 第二』でも、肅宗から遠ざけられ出かけた旅から生れた「北征」の創作の経緯について、馮至の『杜甫伝』が詳しいとして、論旨を要約しながら詳細な紹介をしている（57～62頁、原書では、68～71頁）。このような新中国を印象づけるような杜甫の新しい伝記研究への関心が1960年の中国訪問時に馮至との会見を実現させることになる。視察の目的から当初は考えていなかった、馮至との会見が思いがけずに実現したことは、「われわれが北京へ着いて、文字

改革視察の目的を果たすために会見すべき当事者や見学すべき方面についての打ち合わせをおこなったとき、一行のうちで特に逢いたい人たちがあ
るなら、その名を申し出ておくようにといわれた
ので、各自にそのリストを作った。ぼくは、
馮至先生と蔣兆和先生にもおめにかかれたら、さ
いまいである旨を申し入れておいた。馮氏は北京
大学の教授で、『馮至傳』、『杜甫詩選』の著述
があり、蔣氏は齊白石翁生存中から、すでに中国
画壇一方の重鎮として知られている。その杜甫像
にぼくは、傅庚生『杜甫詩論』の中で接し、この
推重すべき一幅のごときを、もし書齋の壁間にか
かげることができたら、と思っていたのである。
（傅氏は西安に住んでいられるということで、面会
は断念せざるをえなかった。）『杜甫草堂記』（春
秋社，1962年8月，184～185頁）と、土岐善麿自
身が書いているとおりである。

1960年の中国文字改革学術視察団団長としての中国訪問については、その背景と歴史的な意義を中心に、拙稿「土岐善麿の初回の中国訪問をめぐる」（『日語教育と日文学』2013年第3輯）で検討した。北京で馮至と会談できた感動は、『四月抄』（東峰出版，1963年2月）に収められた、

杜甫のため酒会の席に乾杯す 蔣兆和画伯
と馮至教授と

『杜甫伝』も『杜甫詩選』もすでに読みたり
と 語れば われの訳書をみしという

特装本に署名してみずからわたされつ 若
竹さやぐ北京大学の庭

という旅行詠からも伝わってくる。1956年に人民文学出版社から刊行された『杜甫詩選』は、馮至が選詩をし、浦江清と吳天五が注を施したものである。馮至から贈られた同書を、成都で夜遅くまで読んだ一夜のことを、土岐善麿は後日懐かしく振り返っている（前掲『杜甫草堂記』，159頁）。

馮至との会見の忘れ難い印象は、杜甫について最後に出した本である『新訳 杜甫』の中でも繰り返し書かれている。

すぐれた杜甫伝の著者として知られる馮至氏は、詩聖における最終的苦難の生活状況を小説ふうのものにまとめ、「白髮間生黒一絲」と題し、一九六二年「人民文学」の

四月号に発表されたが、それは杜甫生誕一千二百五十周年を記念する詩人教授の創作とみられ、その二月には、詩聖の悲劇的一生における「一種樂觀主義精神」についても、短い論考を「人民日報」に寄せられた。いまそれらを読みかえして、そぞろに一九六〇年の春四月、北京大学で初対面のき、静かに構内を案内されたのち、別れぎに、『杜甫詩選』の特製版に署名したのを「俗書ですが……」と、学者らしくいって贈られたことも忘れ難い。（「そえがき」、400頁）

文中の「白髪間生黒絲」は、武人といえる蘇渙との交流を通して、多病がちの晩年の杜甫が精神的に若返っていくさまを描いた作品である。創作のきっかけとなった土岐善麿が推測している杜甫の生誕行事で馮至は「紀念偉大的詩人杜甫」という報告を行っており、翌年この記念行事に合わせて中華書局から刊行された『杜甫研究論文集 三輯』にこの原稿が収められている。封建勢力からの圧迫や貧病に苦しめられた人生であったのにも関わらず、杜甫が決して現実逃避をしなかったのは、その樂觀精神からだと言った短い一篇は、「人間要好詩」と題するもので、前者の創作は『馮至全集第三卷 山水 伍子胥』（河北教育出版社，12月，454～466頁）、後者の小論は『馮至全集第六卷 杜甫传诗与遗产』（河北教育出版社，12月，155～159頁）にそれぞれ収められている（土岐善麿「老学生手記」『斜面相問抄』（光風社書店，1978年）では、会見時の忘れ難い印象とともに、先生の杜甫の家を訪ねられなかった弟子と、靴一足を川岸に残して杜甫が万山の奥深くに分け入って姿を消したという杜甫をめぐる二つの故事を通して杜甫と人々との関わり方を示唆的に詠んだ馮至の『西郊集』「旧的和新的故事」中の一首「杜甫」にも触れている。

人民詩人としての杜甫の評価は、北京での歐陽予倩らとの交流からも実感されたことであった。土岐善麿は歐陽予倩から、

艸堂新構對芳春 杜老當年歷苦辛 借問而今誰繼武 工農憶萬盡詩人

という自作の詩を贈られ、誰かに継ぐという「武」

は、軍国主義のそれではなく、「おそらく詩経の毛伝にいう「述」のことであろう」との感想を持つ体験もしている（前掲『杜甫草堂記』，34～36頁）。これは、『詩経』大雅に「下武」の詩篇があるのを記憶していたからである。「毛序」には「下武繼文也」とある。杜甫の「詩人的な希望の夢」を人民の現実の生活の上に実現していこうという中国社会の意志のようなものを歐陽予倩の詩から感じたのであろう。歐陽予倩は谷崎潤一郎とも交流のあった劇作家で、京劇の舞台にも立った役者でもあった（谷崎は「欧陽予倩君の長詩」「旧友欧陽予倩君を憶う」で二人の交流を書いている）。現実の中国の地を踏み、馮至や歐陽予倩らと交流し、杜甫への思いとともに理解もまた深まっていったことはその後の土岐善麿の研鑽を見ても理解できる。

二

土岐善麿の本格的な紹介とまとまった翻訳を行ったのは、日本文学研究家で翻訳家であった李芒である。李芒と土岐善麿の交友を見ていく前に、まず李芒の略歴を確認しておく。李芒が自らの経歴に触れた文章として、李芒著 水谷誠訳「日本文学研究述懐」『日本文学』（第29巻第9号，1980年9月）がある。

李芒は、1920年撫順市に生まれる。9歳の頃、6ヶ月ほど私塾で毛詩の暗唱をさせられ、それが後年の古典詩歌愛好へとつながっていく。撫順炭鉱付設の小学校と奉天鉄路学院機務専修科で六年ほど日本語の教育を受け日本語の基礎を作った。日本文学や中国文学、またヨーロッパ文学の日の翻訳に親しみながら、1940年頃から中国語で詩歌や短編小説などを発表するようになる。1944年には、満州映画協会に入り台本作成の勉強をする。1945年、革命に参加、新中国成立後、1952年に創刊された外国文学雑誌『訳文』に日本文学の翻訳紹介を始める。1970代までは、中国の政治事情を反映して、プロレタリア文学を中心に、徳永直『没有太陽的街』（人民文学出版社，1958年9月）、『徳永直選集』（人民文学出版社，1959年11月）、『黒島傳治短篇小説選』（上海文艺出版社，1962年

6月),堀田善卫『鬼无鬼岛』(作家出版社,1963年4月,1章から9章まで,以下は,文潔若訳),小林多喜二『在外地主』(人民文学出版社,1973年10月)などを翻訳している。1980年代以降は詩歌が中心となっていき、『万叶集選選』(人民文学出版社,1988年10月)のほか,「奥州小路」李芒・黎续德主编『日本散文精品 詠物卷』(云南人民出版社,1999年6月),『山头火俳句集』(浙江文艺出版社,1991年9月),『金子兜太俳句选译』(译林出版社,1995年8月,「和歌俳句丛书」中の一冊)など俳句の翻訳を多く手がけている。和歌・俳句についての翻訳論も含め,作家論を中心にして日本文学研究をまとめた『投石集 日本文学古今谈』(海峡文艺出版社,1987年12月)と『采玉集』(译林出版社,2000年5月)の二冊の論文集を出していて,李芒の研究業績の全体像が掴める。

李芒は,「和歌汉译问题小议」『日语学习与研究』(1979年第1期,同年3月)で,和歌の漢訳について問題提起をし,この後,賛否両論の論文が続いた。この論文で李芒が主張していることは,「译歌句数和字数,难以要求一律,宜从原歌出发,使用七言(一般多用于译长歌)五言、四言和长短句等等多种多样的形式。一个总的精神则是,不论使用任何形式进行翻译,表达都要力求接近原歌,力求简练,除非不得已时,绝不轻易变通,绝不外加词语,或减少原歌的内容。」と,翻訳に当たって句数と字数を一律には考えず,表現を原歌の内容にできるだけ近づけるべきだということである。口語自由詩の詩型は考えていないので,古典語の風格を失わずに原歌にふさわしい定型を見定めて訳出するというのが基本的な考えである(日本古典詩歌の翻訳は,白話(口語)訳は少なく,文語(文言)訳が主流で,詩型とリズムをどう選ぶかで議論がされてきた,金中《日本詩歌翻译论》北京大学出版社,2014版を参考)。

土岐善麿は,杜詩の現代中国語による翻訳が詩的な感性に欠けることを指摘した上で,「日本語としては,杜甫とおよそ時代を同じくする,いわゆる古典語があって,それは万葉集や古事記などに使われ,文献としても今日も読むことができる。一種の錯覚的な仮説を取てすれば,もし万葉人が,杜甫と同じような対象,題材,心情を表現とする

としたら,一もちろん,その全部ではないが,一記紀の歌謡,万葉集のことばと,韻律的構成とによるかもしれない」(「あとがき—中国の詩の日本的な読みかたと訳しかたについて—」『新訳杜甫詩選』223~234頁)と述べているので,これは日中の古典詩の双方の古典語による移し替えという共通の出発点に立っているといえることができる。

この「小議」の中で李芒は自らの翻訳の実践例として,土岐善麿の「いのちありて三たび北京の大地を踏む春きさらぎの風も寒からず」(『いのちありて』(大法輪閣,1975年6月)の作を「有余年,北京大地三番踏,二月春风不觉寒。」と訳出している(初句は,年画のおめでたい言葉「连年有鱼(=余)」を連想させるので後に「得永年」と改めている(前掲『投石集』「前言」参照))。この漢訳を土岐善麿が目にしていたことは,「わが歌をかくも自在に訳したる 知己の大陸にありしと知らず」(『周辺』第8巻第4号,1979年12月)の作から知られる。李芒自身も土岐善麿に関心を寄せていたが,二人の対面が実現するのは1979年である。この年,中国社会科学院訪日代表団の一行として李芒は日本を訪れている。日本滞在中は,中国における日本文学の研究や翻訳について講演会や座談会を行なっている。この時の体験を踏まえ,前述の和歌漢訳について問題提起をした一文が草されるのである。座談会の記録として,岡田袈裟男記「李芒先生歓迎座談会—中国における日本文学研究の現状」『古代研究』(第10号,1979年9月)があり,座談会の後半では短歌や俳句の翻訳について自説を発表している松浦友久も加わり議論が交わされている。

李芒は,日本滞在中に「日本文学在中国的翻訳和評價」と題する講演(原稿は,後に『日本学刊』1992年第5期に掲載される)を行なっており,冒頭で土岐善麿の「雪の富士とかすみの万里長城と天地は広く かくも近かりし」「日中抄」『日中文化交流』(第265号)という作を「白雪蒙富士 雲靄罩長城 天地雲遼闊 相逢咫尺程」と漢訳して紹介している。この講演原稿は,実藤恵秀の訳で「中国における日本文学の研究と紹介」と題して,『周辺』(第8巻第5号,1979年12月)に掲載されている。6月17日に李芒が万葉学者の中西

進とともに土岐善麿邸を訪ねたときにこの講演原稿を土岐善麿に手渡し、それを一読した時の感想が「李芒氏を斜面荘に迎えて」『周辺』（第8巻第5号、1979年12月、6～7頁）の中に記されている。「李芒氏の訳は、いかにも自由で、歌の表現のヴァリエティも、よく理解されているらしい。」というのが土岐の評価であった。

李芒が、和歌漢訳を再論した「和歌汉译问题再议」『日語学習与研究』（1980年第1期）の中に、土岐邸訪問時の二人のやりとりを反映した一節が見られる。前述した李芒の漢訳への肯定的な土岐善麿の評価を引いた後、「这当然是过奖，含有鼓励的意思。不过这里他说明了两个问题，一是和歌表现的内容及其表现方法是多样的；二是翻译也适于根据这特点采取灵活的方法。」と、過褒だとしながらも土岐善麿の言葉には二つの問題が指摘されているとして、一つは和歌の表現手法が多様であること、二つにはそのような和歌の特徴に合わせてその翻訳は柔軟でなければならないとする。さらに漢訳が五言絶句のようなものになっていることは、日本の歌と中国の詩の表現を考えさせることになること、土岐善麿が言及したとして、前引の「白雪蒙富士…」の自訳について触れ、土岐邸を訪問して原歌の創作背景を知らないまま訳出していたことが分かったと明かしている。それは、中日の平和記念の郵便切手を土岐善麿が目にしての作で、長城と富士山を左右に配した図案と、切手の真ん中に刷られた「中日两国人民 世代友好下去」の言葉が、「五言絶句的なものになっていることも、日本の歌と中国の詩の表現を考えさせるもの」なので、土岐自身興味を感じて詠んだものだということであった。その話を聞かされ、「かくも近かりし」の言葉にこめられた土岐の感慨の深さが、初訳では十分に表現されていなかったとして、李芒は「近在一望中」と改訳している。

李芒にとって土岐との面会は実りのあるものであった。二人の会見については、同席した中西進が「斜面荘を涼風が透きとおる夏日お二人は会見された。李氏が中国語訳された先生の短歌を、先生が微声をもって音読される。それを李氏が彫りの深い温容をもって、じっと見守る。座の、香り高いひびきが私に教えてくれたものは、悠然とし

て国境をこえ、時間を超越した文学の世界であり、先生のかかえている空間の大きさであった」と記している（「雪に刻む」『周辺』第9巻第2号、1980年11月、156頁）。

李芒が日本訪問をきっかけに、『日本歴代和歌選』の準備を始めたことはいくつかの文章から知られる（前引の李芒論文「日本文学研究述懐」などを参照）。その準備のなかで、土岐善麿について「“睦邻反霸理相联”一记日本杰出歌人土岐善麿」『世界文学』（1980年第2期）という論文と「土岐善麿短歌三十三首」『日語学習与研究』（1980年第2期、出来上がったばかりの新作として土岐善麿から贈られた『寿塔 土岐善麿歌集第二』（竹頭社、1979年6月8日）から訳出している、本稿の校正時に土岐善麿の訃報を聞き、東京で面会したときの土岐の「音容笑貌」を思いだし、感慨に堪えないとして、哀悼の念を記している）という翻訳紹介がまとめられている。土岐邸訪問時に、李芒はその元となる草稿を示して、選歌と漢訳が適切かどうか質問している。目を通した土岐善麿は「“诚然！”“原来是这样！”」などと答えたという。原歌の面貌がこの漢訳の通りなのだと土岐善麿が納得して頷いたというのである。「“睦隣反霸理相聯”一記日本傑出歌人土岐善麿」は、土岐善麿の歌人としての生涯と思想、また中国との友好について委曲を尽くしてまとめたものである。

「睦隣反霸理相聯」は、土岐善麿の前掲『寿塔 土岐善麿歌集第二』「日中抄」に収められた「睦隣反霸 理は相聯ると叫びたる こだまよ山によみがえれ」の歌によったものである。李芒は、「睦邻反霸理相联。齐呐喊，回声唤醒万重山。」と訳している。

李芒は説明を加えていないが、「睦隣反霸」の歌には出典があり、「弹指光阴四十年，卢沟晓月将如船，乘风共济待明天。/ 但愿笙歌传四海，莫教烽火再绵延。睦邻反霸理相联。」郭沫若「纪念抗战胜利四十年（浣溪沙）」（浣溪沙は詞牌の一つ）を踏まえたものである（『沫若诗词选』人民文学出版社、1977年9月、423頁（初出は、『人民中国』1977年7月号）、『诗词选』は郭沫若最後の作品となる）。土岐善麿はもう一首「「弹指光阴四十年」と今顧みて「睦隣反霸」の

詩句のきびしき」(前掲『寿塔 土岐善麿歌集第二』「弾指抄」)という歌も詠んでいる。土岐善麿と郭沫若の交友については次節に述べるが、善麿は郭沫若の作品を読みながら、日中の交流や、中国のことまたそこで生きる人たちのことを考えていたのである(「日中文化交流協会成立十五周年記念」と題された「漫天飞雪迎春回，岭上梅花映日开。一自高丘传号角，千红万紫进军来。」(前掲『沫若诗词选』，393頁)という郭沫若の七絶を踏まえた「げにまさしく千紅万紫 新たなる平和の春をともに迎えたり」という歌も土岐善麿は詠んでいる、郭沫若自身のこの詩の揮毫を複写して土岐善麿は書斎に飾っていた)。

李芒は1980年の再度の日本滞在の折に、この二つの論文を土岐善麿に届けて、指教を得たいとの希望を持っていたが、同年3月の土岐の死でそれは実現しなかった。李芒は訃報に接し、七絶の連作を作っている(「土岐先生を懷う(小詩十一首)」『周辺』第9巻第2号，1980年11月，48～49頁)。その内の二首を以下に引く。

杜詩読畢慰平生，憤世疾俗一脈承。優国優民
詩聖志，先生三代繼遺風。

この詩では、国を優え民を優えた詩聖杜甫の志を、明治・大正・昭和と杜甫を読みつぎながら土岐善麿が継承していったと詠んでいる。連作の最後は、

巨孽仙遊何処尋，重逢無日意難禁。華章多記
平生志，常念故人饗国人。

という作である。華章は美しい詩文の意。土岐善麿と再び会うことのできない悲しみを述べ、故人を偲びながら翻訳の仕事に専心していきたいと結んでいる。

土岐善麿の作品の翻訳に関して触れておきたいのは、申非「鑑真和尚 土岐善麿」『世界文学』(1980年第2期)である。申非は日本文学の翻訳者であるが、能と狂言の翻訳がなかでも高い評価を受けていて、『日本狂言选』(人民文学出版社，1980年2月)と『日本謡曲狂言选』(人民文学出版社，1985年5月)の二冊の翻訳がある。謡曲については銭稻孫と劉振瀛の翻訳がわずかにあるだけなので未訳の十八曲の紹介は貴重である。申非の能の翻訳について、自らが翻訳している影響もあり、三分の一が『平家物語』関係の能であることと中国の読

者の理解を考えた選択が行われていると丁曼は評価している(『日本能狂言在中国的译介』学苑出版社，2015年1月，160頁)。土岐善麿の新作能「鑑真和上」は、鑑真和上円寂一千二百年の記念行事のために書かれたものである。申非はまずその経緯を紹介をしてから、能の劇作法を紹介するとともに、作品理解の一助として鑑真の事跡にも触れている。翻訳に付された注解は、詳細なものだが、土岐の「鑑真」『新作能縁起』(光風社書店，1976年6月，184～197頁)に示されている「出典」と安藤更生『鑑真』(吉川弘文館，1978年版)とを参考にしたものである。

申非の訳した「鑑真和上」は、中国において新作能を最初に紹介したものでそれだけに意義がある。申非の翻訳が、自分の一文とともに『世界文学』誌にまもなく掲載される予定だと、2月5日の日付のある書簡で、李芒は土岐善麿に知らせている(「春信—李芒氏の北京だより—」(『周辺』第8巻第5号，1979年12月，8頁)。しかし、善麿自身は印刷された紙面を目にすることはできなかった。

三

最初の北京訪問から始まる土岐善麿と郭沫若との交流について、亡くなる一年前の94歳の時に刊行された『土岐善麿歌集 第二 寿塔』の「あとがき」で、「すでに老境の生活ではあるが、一九六〇(昭和三五)年の四月，中国との文化交流事業に加わって，文字改革学術視察団一行と共に，はじめて北京に赴いたときから，特に，郭沫若氏そのほか数氏との交情を深め，六四年九月には，建国十五周年国慶節の祝典に参列し，さらに，七三年二月，国交正常化後，また団長として責務を果たしたわけで，老朋友の交歓が，ずっとつづいている。新作能「鑑真和上」の上演，『天の原ふりさけ見れば』にまとめた阿倍仲麿研究のごときも，郭氏が「晁衡来，鑑真往」として，日中文化交流の歴史的意義をうたった詩詞に対応するものであり，「東征抄」，「望郷抄」等は，その一聯をなすものである。」(303～304頁)と，「老朋友の交歓」が続いてきたことを感慨深げに回顧している

（郭沫若の死去は 1978 年 6 月）。

文中に出てくる『天の原ふりさけみれば』（蝸牛社、1976 年 11 月）は、書名にもなっている阿部仲麻呂の望郷歌の「契機」を探るとともに、中国の友人たちとの交流も重ねながら描いた作品となっている。阿部仲麻呂の望郷歌の周辺を調べるきっかけとなったのは、1975 年 10 月の楚図南の三度目の土岐邸訪問である。この時の歓談の中で中国と日本の長い文化交流を証明するものとして、楚図南は阿倍仲麻呂と鑑真を話題に挙げ、それに土岐善麿が共感を感じたのである（前掲『天の原ふりさけみれば』、4～5 頁）。楚図南はホイットマン『草葉集』やニーチェ『ツァラトゥストラ』などの翻訳もある文学者で、書にも秀でていた。1973 年 4 月の二度目の土岐邸訪問時には日本との交流の深い冰心や詩人の李季も同道していて、その交歓の様子は、土岐善麿の「詩客茶客」『いのちありて』（大法輪閣、1975 年 6 月、91～96 頁）に描かれている。『天の原ふりさけみれば』の一冊を土岐に書かせるきっかけとなったのは、楚図南との友情の絆とともに、「鑑真和上円寂一二〇〇年記念行事」のために贈られた郭沫若の「奉賛詞」にも引きつけられるものがあったからである。郭沫若の「滿江紅 紀念鑑真」は、自筆の書影とともに全文の訳解が、安藤更生・亀井勝一郎編『鑑真和上一円寂一二〇〇年記念』（春秋社、1963 年 11 月、図版 24・163 頁）に載せられていて、同書には「しお風に しいしおん目を ぬぐうとき / 若葉あかるく さしかわす影よ / 照りわたる道よ」という土岐善麿の「鑑真和上讃歌」も載せられている。郭沫若の「滿江紅、紀念鑑真。」（「滿江紅」は詞牌の一つ）の中の「晁衡來、鑑真往。」の句がなかでも土岐善麿の目に止まったのである。郭沫若の「奉賛詞」は、『天の原ふりさけみれば』の中でも紹介されている。

1964 年の土岐善麿の二度目の中国訪問は、日中文化交流協会代表団団長として、一行の副団長白石凡^{ぼん}（朝日新聞論説主幹・日中文化交流協会常任理事）、中川一政（画家、1958 年に訪中し「中国遊記」を書いている）、牛原虚彦^{きよひこ}（映画監督、記録映画『新しき大地』の監修をしている）、木村伊兵衛（『木村伊兵衛写真集 中国の旅』などの作品集もある）、

杉村春子（文学座女優）、白土吾夫^{しらとのりお}（日中文化交流協会事務局長）、木村美智子（日中文化交流協会幹事）とともに建国十五周年の国慶節祝典に参列するためのものであった。

北京で 4 年ぶりに再会した郭沫若に、土岐善麿は、杜甫に関する色紙をいただければと申し出ている。それに対して、郭沫若からは杜甫と李白とを対比した五絶が贈られてきた。その色紙の書影は、『杜甫周辺記』（春秋社、1967 年 9 月、16～17 頁）に載せられているが、詩の内容は土岐との会見時に郭沫若がお互いを杜甫と李白それぞれに重ねながら、杜甫は「リアリスト」で李白は「ロマンチスト」だと話したことと関わるものであった。旅先のことで郭沫若の真意を十分に確かめることはできないまま、帰国してから、1962 年 4 月に北京で举行された「杜甫生誕一千二百五十年行事」で郭沫若の行なった開幕の辞「詩歌中的雙子星座」（『光明日報』同年 6 月 9 月、後に前掲『杜甫研究論文集 三輯』に巻頭論文として再録）での両詩人への評価を踏まえてのものであったことが分かる。この論文の結論のところで郭沫若が述べていることは、「今年是杜甫誕生的一千二百五十年週年，也恰巧是李白逝世的一千二百年週年。我們希望在紀念杜甫的同時，我們的心中也紀念着李白。我們要向杜甫學習，也要向李白學習，最好把李白和杜甫結合起來。李白和杜甫的結合，換一句話說：也就現實主義的結合」というものであったが、土岐は自ら日本語訳した上で、「こうしてこの新しい時代に郭氏が杜甫とともに李白に対していただく景慕の心，それが右の五絶に表現されていることは，はからずも杜甫と一對の紀念になったわけで，まさに韓退之のいわゆる「李杜文章あり，光焰万丈長し」である」（前掲『杜甫周辺記』、20 頁）と、感想も付け加えている。

1972 年 3 月、日中友好運動を広げるため、河原崎長十郎演出により郭沫若原作の『屈原』が上演される。それを踏まえて詠んだと思われる土岐善麿の「屈原上演」は、「価値あらば 上演を今もよろこぶと 旧作を旧知の信義にまかす」の一首から始まる（前掲『土岐善麿歌集 第二 寿塔』140～143 頁）。連作中から郭沫若や中国への土岐善麿

の思いのよく伝わる歌を引いてみる。

その悲憤を生きて現代に伝えんと『屈原賦今訳』あり この史書あり

彼はげに中国の一位偉大詩人 同時に思想家政治家なりき その運命よ

粽を解き 『屈原精義』を読みながら 大陸の旅の忘れ難しも

郭先生とまた語る日を いつかと待ち つねに相見るごとく老いつつ

『屈原精義』は、清の陳本礼の著した屈原賦の注解であるが、早稲田大学図書館古典籍総合データベースで公開されている土岐文庫中の当該書を見ると、「ごいっしょに中国に旅する紀念に」と、原富男による贈呈の墨書が確かめられる。中国思想家の原富男は、1960年の中国訪問時の同行者である。『屈原賦今訳』（『郭沫若全集 文学編第5巻』人民文学出版社、1982年10月）は、史劇『屈原』とともに郭沫若の作。「その運命よ」は、文化大革命とともに郭沫若が厳しい自己批判を行なったことを踏まえているものと思われる（自己批判は、郭沫若の変節と捉えられ日本ではさまざまな反響を生んだ、郭沫若の置かれた当時の状況も含めて、武継平「郭沫若の自己批判の懸案」（『言語文化論究』第20号、2005年2月）を参照。1978年6月、郭沫若の訃報に接し、『朝日新聞』に寄せた「草木には今昔あり、人情には変遷なし」の中で、土岐善麿は、郭沫若が「常に、「批判」的な方法によって現実的に行動した人物だとした上で、「文化大革命」の複雑な過程、それは「怪奇」ともいえる多難多事な時期であったとおもわれるが、そのあいだに処して、まさに「文化戦士」としての節を守ったことは、これも厳しい「批判の人」であったればこそと思われる」と、郭沫若への変わらない信頼を書き残している（6月20日付け夕刊）。

1973年、88歳の時、土岐善麿は日本文化界代表団団長として北京の三度目の訪問を果たす。この時の一行は、副団長戸板康二（歌舞伎演劇評論家）、白土吾夫（日中文化交流協会事務局長）、井手雅人（脚本家）、徳田六郎（エスペラント研究家・NHK解説委員）、小松久麿（政治評論家）、瀬戸内晴美（作家）、田中信昭（東京混声合唱団常任指揮者）、

篠弘（歌人）、原信之（日中文化交流協会事務員）である。この時の訪問については土岐善麿の側近くにいた篠弘の記録がある（「北京の春（一）～（七）」『周辺』第2巻第3号～第4巻第1号）。高齢になってから再び実現した北京訪問が土岐善麿にとって特別に感慨の深いものとなったことは上述した通りである。

最後となるこの訪問で実現した郭沫若との再会の模様は、長めの引用になるが、土岐善麿の文章から引くと次のようになる。

北京では、五日の夜、郭沫若・廖承志・胡愈之、ぼくにとっては旧知の三先生が、人民大会堂の一室で、一行のために盛大な歓迎宴を催してください。対外友好協会の楊驥副会長をはじめ、孫平化、葉籟士、李季、浩然、李福德、韋建業などの諸氏も同席し、郭先生の懇切なあいさつをうけて、ぼくが謝辞を述べたのであるが、この宴席に先だって、郭先生が特に、団長のぼくを賓館の一室へまで訪ねて来られたことは、破格の待遇として、まことに恐縮にたえなかった。ぼくは久しぶりの歓談のさい、記念として携えて行った新刊の『日本金石図録』と近著の『新訳 杜甫』などを贈呈したのであるが、そこから宴会場へまで、肩をならべて歩くあいだにも、ともにいわゆる老健を喜ぶ心の通いあったことは、国交正常化を祝いあう象徴的なすがたとも見られたのではあるまいか。なお、翌六日、郭先生からは『毛主席詩詞三十七首郭沫若書』と題する大冊、『李白与杜甫』および『考古学報』に、それぞれ署名したのを届けてくださった。詩詞の墨書は、いかにも両者の同志的友情があざやかにうかがわれる刊行物であり、『李白与杜甫』は、すでに架蔵の二部があつて、著者署名のものを重ね得ることになった。「考古学報」は一九七二年第一期のもので、巻頭に論文「古代文字之弁証的發展」が収められてあり、別に人民中国報道社・外文出版社から贈られた『新中国出土文物』とあわせて、帰国後の読書の楽しみがふえたわけである。（前掲『いのちありて』、60～61頁）。

『いのちありて』の口絵の記念写真集の最初に飾られているのは、「郭沫若氏と握手」のキャプションが付けられた一枚で、両者の友誼の深さを感じさせる印象深い写真である。土岐善麿が寄贈を受けた『毛主席詩詞三十七首』は、1965年に人民美術出版社から刊行された郭沫若書のコロタイプ印刷である。郭沫若は郭体といわれるように書家として一家をなしていたが、土岐善麿は前述の『朝日新聞』に寄せた追悼文で恵贈されたこの書から、「暢達俊逸の筆で運ばれるすがたまで眼の前にあるようで、そのすぐれた人格による書格というようなものが感じられる」と感想を述べた上で、「日本では詩人とか書家という専門があるものとされているが、この毛詩詞・郭書をあわせてみるだけでも、その現実性というもうべきものに、この方面の日中の相違が考えられるように思われる」と職業的な専門性とは無関係な、郭沫若の人となりが反映した独自の「書格」について意見を述べている(郭沫若の書法について、日本では書法美学の河内利治「郭沫若書法管見」『郭沫若研究会会報』第12号、2011年3月による分析がある)。

1962年の「詩歌中的双子星座」に対して、1971年の『李白と杜甫』では論調が大きく変わって杜甫へ大変厳しい評価を下した内容であったことは前述したとおりである。郭沫若のこの書は、馮至・蕭滌非・傅庚生に代表される50年代の杜甫研究に見られる強固な伝統的意識への反発や、時局への複雑な反応など、表面的な論調を超えて郭沫若の真意を読み取るのが難しい著作になっている(研究史に、楊勝寛《〈李白と杜甫〉研究綜述》、《郭沫若学刊》2009年第2期があり、最新の論としては、李斌《郭沫若〈李白と杜甫〉著述动机发微》、《首都师范大学学报(社会科学版)》2017年第4期があり、詳細な検討が行われている)。

土岐善麿がいつ日本に来られるのかと質問したのに対して、郭沫若は「もちろん行きたいと思っている。わたしの人生経験の四分の一の期間、日本の人民のつくった米をたべていたのですからね」と感慨深げに答えたという(前掲『いのちありて』、70～71頁)。この会見の中で土岐善麿は李白と杜甫への私見を披瀝することはしなかった

が、「求同存異」という周恩来の言葉とともに何かこだわるものを感じていたことは、

時代と人のきびしさよ さらに 著者署名
の『李白と杜甫』を旅に読むとき
という「北京抄」の一首からも読み取ることができる。

土岐善麿に贈った1964年の二枚の色紙について、「いつか書いてあげた二首の詩に関する解釈は、あなたの書かれたとおりです」と、郭沫若は答えたという(前掲『いのちありて』、68～69頁)。郭沫若の「ロマンチズムは、リアリズムの上に立って、そこに社会主義の文芸理念と創作方法を発展させている」というのが土岐善麿の解釈であった。李白と杜甫、二詩人への新しい評価を知った1964年の旅を思いだし、それから過ぎた歲月の中で杜甫を読み進めてきた自らを振り返って土岐善麿には深い感慨があったはずである。

参考文献

- 『短歌(土岐善麿追悼特集)』第27巻第6号、1980年6月
- 『周辺(土岐善麿追悼特集)』第9巻第2号、1980年11月
- 清水茂太『土岐善麿 人物書誌大系5』日外アソシエーツ、1983年7月
- 武川忠一『土岐善麿』桜楓社、1980年10月
- 土岐善麿『土岐善麿歌集』光風社書店、1971年6月
- 土岐善麿『土岐善麿歌集 第二 寿塔』竹頭社、1979年6月

金子文子の形象化をめぐる

—瀬戸内晴美『余白の春』論—

安 元 隆 子^{*1}

Review of giving the form of kaneko Fumiko
— A study on Setouchi Harumi 's "Yohaku no haru"—

Takako YASUMOTO^{*1}

This essay explained about "Yohaku no haru" written by Setouchi Harumi. Setouchi wrote Kaneko Fumiko's biography based on Kaneko Fumiko's autobiographical novel "Nani ga watashi wo kousasetaka". The features of Setouchi's novel are next.

1. She wrote this biography based on the research done in these days. 2. She wrote this in field surveys. 3. She expressed her friendship towards Korean people just same as Kaneko Fumiko. 4. A weak point of this novel is that nothing is mentioned about her being raped by unknown assailant. This is a very important matter, but Setouchi didn't write this in the biography. 5. She was interested in the reason for Kaneko's suicide. She thought the Kaneko's love for her partner Paku couldn't last and Kaneko's nihilism killed her. But the study of Kaneko's nihilism didn't contain much detail. I will return to this subject again.

【はじめに】

1923年の9月1日に起きた関東大震災を契機に朝鮮人暴動の流言が広がり、在日朝鮮人が虐殺される中、金子文子は朴烈と共に保護拘束され、拘留された。そして、1925年7月には皇太子暗殺の意図があったとして、刑法第73条（大逆罪）及び爆発物取締規則違反容疑で起訴され、翌1926年3月25日に死刑宣告を受ける。この後、無期懲役に減刑されるも、7月23日に栃木女囚房内で縊死を遂げた。

金子文子が「無籍者」ゆえに教育の機会を奪われ、親の愛に恵まれない幼少時代を送ったことや、続く朝鮮時代の悲惨な生活の様子、帰国後、精神の自立を求めての上京生活は、金子自らが執筆した自伝『何が私をかうさせたか』¹に綴られている。

る。しかし、この自伝に書かれているのは主に朴烈と出会った頃までであり、この後、いわゆる「大逆事件」に至る経緯、そして、拘束後に自ら命を絶つまでの彼女の精神の軌跡は残された尋問調書、公判記録、僅かな短歌や書簡等から辿るしかない。金子文子は何故自ら死を選んだのか。その末期の思想について探求しているのが瀬戸内晴美の『余白の春』²である。瀬戸内は次のように書いている。

文子が筆を擱いた朴烈との出会い以後をさぐり、文子を書いた半生の更に深部に光をあててみるに足る魅力を、充分に持っている女性であった。³

本論では、この瀬戸内の『余白の春』に描かれた、瀬戸内の紡いだ金子文子像、特に彼女の末期の思想について検討する。管見では、本論で触れ

*1 日本大学国際関係学部国際教養学科 教授 Professor, Department of Liberal Arts, College of International Relations, Nihon University

る李順愛氏の「日本人女性と天皇制」⁴の他は、この著書について本格的に論じたものは見当たらない。この著書を論じることは、金子文子の死後、彼女が後世の人々にどのように語られ、享受されてきたのか、金子文子受容の一端を明らかにすると共に、金子の至りついた思想解明のための一助となることだろう。

【1】菅野須賀子、伊藤野枝そして金子文子

瀬戸内晴美は『余白の春』以前に、明治の大逆事件の唯一の女性被告・菅野須賀子の伝記『遠い声』⁵を執筆している。これは菅野須賀子が遺した「死出の道艸」⁶を基に、絞首台の露と消えるまでの菅野須賀子を追ったものであり、幸徳秋水や荒畑寒村との交情、そして、社会変革への意志と直接行動主義をとるに至った菅野須賀子の跡を辿っている。全文は「私」が語っており、菅野須賀子の独白の形をとっている。

これに対し、金子文子を描いた伝記文学『余白の春』は、語り手「私」がいて、その語り手「私」が金子の生きた跡を辿る。それはまず金子の残した自伝『何が私をかうさせたか』を検証する旅である。金子の実家のある山梨、朝鮮の英江、金子が埋葬された栃木の刑務所の無縁墓地や聞慶の山中の墓を訪ねている。

瀬戸内は、

私の過去の生活が総ての権力を否認し叛逆して、自分はもとより人類の絶滅を期してその運を計っていたのであります。それゆえ私はいずれは爆弾を投じて自己の最後を遂げる意思でありましたけれども、その結果日本に革命が起きようと起きまいと、毫も私の知ったところではない。私はただ自分の気持をさえ満たすればそれで満足している⁷

という金子の心の闇に惹かれ、「私は文子の生い立ちをたどる以前に、文子の死様や、死の周辺のことを気がかりになるのである。」⁸と書き、特に文子の最期に関心を示している。

しかし、その死を描いた『余白の春』は金子文子自身の死の描写から始まってはいない。大杉栄と共に憲兵大尉・甘粕正彦に殺された伊藤野枝の

手紙の一節から始まっている。平穏無事な家庭の幸福がいつ奪い去られるのか分からず、尋常ではない死の別離が到来する覚悟を述べる内容である。この覚悟が現実となり、関東大震災を機に朝鮮人暴動の流言飛語が飛び交い、朝鮮人狩りがエスカレートしていく。この朝鮮人虐殺の様子を確かめべく瀬戸内は生き証人を尋ねて大和郡山市を訪ねた様子を記す。『東京震災録』⁹や『昭和時代』¹⁰『横浜市震災誌』¹¹といった書物からの引用だけでなく、こうした自ら取材した証言を挿入することにより、瀬戸内は当時の状況に鮮明な色付けをすることに成功している。このように文献から得た情報を自らの手による取材によって検証していく方法はこの『余白の春』に徹底している。それは瀬戸内の真実を確かめたいという探究心の表れであり、また、読者に事実の確かな重みを印象付ける。

続いて瀬戸内は関東大震災の騒乱の中での大杉栄と伊藤野枝、甥の宗一の検束、そして3人が殺害される場面を描写する。背後からいきなり甘粕大尉に首を締めあげられ殺された大杉に対し、伊藤の場合は甘粕との会話を描写し、その異常な殺害を際立たせている。突発的な天災としての被害だけでなく、人間の奥底にはびこる悪を露見させ、恐怖に満ちた残酷な地獄を現出させた関東大震災について、瀬戸内は次のように書いている。

しかもそれらはことごとく、政府と軍部の陰謀、警察力を動員してつくられ、招きよせられたこの世の地獄であったのだ。¹²

この言葉こそが金子文子と朴烈を大逆罪に導いたものが何であったかを示唆している。大杉栄と伊藤野枝は金子文子と朴烈の死の先達であることを読者に知らせる意図があったゆえ、瀬戸内は冒頭に彼らの死に様を描いたのであろう。

ただ、大杉・伊藤と金子・朴の死に様は大きな隔たりを示している。周知のように、1919年3月1日に朝鮮の独立運動（3.1運動）が起こる。3.1運動に端を発する在日朝鮮人の革命分子と社会主義者の連携を絶つために日本政府が利用したのが、関東大震災だった。大杉と伊藤の告別式は死後3ヵ月経って行われ、大杉の遺骨の持ち去り事件が起きる中、労働運動社、無政府主義団体、

自由連合派諸労働組合の合同主催で700名の人々が参集した。参会者は「無政府主義万歳」と口々に叫び、斎場を取り巻いた警察官は「中止！解散！」と叫び、それはまるで演説会場のようであったと瀬戸内は書いている¹³。そして、同日、難波大輔が、朝鮮人虐殺の責任を天皇に問うとして、虎の門で天皇を待ち受け、ステッキ銃で狙撃して逮捕されるという事件も起きる。幸徳秋水、菅野須賀子らの大逆事件から十余年、難波大助の大逆事件が起こり、政府は威信を賭けてこうした不祥事の再発を防ぐ必要があったのだ。当時の官憲側の意図を瀬戸内は次のような言葉で表現している。

火のないところにも煙をたてて、反逆の芽を摘み取るにこしたことはない。¹⁴

このように、大杉と伊藤の死を冒頭に置くことによって、これから展開する朴烈と金子文子の死がフレームアップされた大逆事件であることを読者に告発していると言えるだろう。

そして、大逆事件を計画し、事前に発覚して捉えられ我が国初の女性大逆罪受刑者として絞首台に消えた菅野須賀子が遺した日記「死出の道艸」と金子文子の残した『何が私をかうさせたか』を比較している。前者は原稿用紙に換算すれば50枚に満たない文章であり、後者は700枚に近い文章である。家庭的に不幸な生い立ちは二人に共通しているが、金子の方がより悲惨だという印象は否めない。しかし、30歳と23歳で夭折した二人の罪名は、共に刑法第73条の大逆罪である。また、幸徳秋水、大杉栄、共に時代が生んだ風雲児であり、卓越した男たちであったが、金子と共に歩んだ朴烈は強い意志と知力を兼ね備えた青年ではあったものの、名もなく貧しい、当時はことごとく差別を受けていた朝鮮人であった。金子はその朴烈を愛し、自らの思想を深めていった。そして、金子は殺害されたのでも刑死したのでもなく、獄中で自ら命を絶っている。こうした金子文子の死は同時代に生きた伊藤野枝とも、また、「大逆事件」の先達ともいべき菅野須賀子とも一線を画している。瀬戸内の金子文子の死への関心の理由はここにある。

【2】瀬戸内晴美の朝鮮の描き方

『余白の春』では、『何が私をかうさせたか』と尋問調書、そして、瀬戸内晴美自身が行った取材を併せて金子の生涯が描かれる。それはほとんど時系列に沿っているのであるが、『余白の春』は金子文子の朝鮮時代の描写を簡略化している。朝鮮では、父方の祖母の家の「岩下」の子になったはずが、いつのまにか「金子」姓に戻されてしまったこと、そこで女中同然の扱いを受けたこと、祖母の吝嗇と虐待に耐えかねて、自殺まで考えた地獄のような生活を送ったことについて触れているが、その詳細はほとんど語られていない。瀬戸内自身も書いているように、自伝の中で文子が朝鮮の悲惨な思い出に費やしているページは全体の4分の1という大きな比重を占めているが、『余白の春』では本文311ページ中、併せてわずか10ページほどである。これは何故なのであろうか。

金子文子の朝鮮時代は、朝鮮という外地の日本人社会と日本人家庭に所属しながらも、実質は日本人より蔑視され虐げられた朝鮮人と同等の立場に置かれたことで、外地の中での日本人社会と現地の人々との差別的構造を実感として知ったのである。この体験なくしては、帰国後の朝鮮人との連帯はなかったであろう。また、『何が私をかうさせたか』の朝鮮時代の記述にある朝鮮人の具体的描写としては、憲兵に鞭うたれて聞こえて来る朝鮮人の悲鳴、祖母に家を追い出された文子に優しく声をかけ、食べ物を与えてくれた近くの朝鮮人のおかみさん、そして、祖母の岩下家に仕える下人・高の姿がある。高は洗い替えのための着物がなく、洗濯のために休みを取らねばならないほどの貧しさであるが、岩下家で愚直なまでに勤勉に働く男である。こうした朝鮮人との出会いが後の朴烈をはじめとする朝鮮人との連帯に結びついたことは言うまでもない。当時の多くの日本人が蔑視した朝鮮人に対する金子の真摯なまなざしは、この朝鮮生活なくしてはありえない。瀬戸内は『余白の春』の本文中に栗原一男の次のような述懐を引いている。

感情家で、純真で、お人好しなんだ。朝鮮での悲惨な思い出話や、朝鮮人がどんなに虐待

されていたかなどという話になると、もう自分のことばに酔ったように激昂してしまって、涙を流しながら、とどまるところを知らない早口でとめどもなくまくしたてるんだな。朴烈がこまって、もういいかげんにしろなんていっても聞かない。どこまでも喋りまくる。そういうところがあった。¹⁵

ここからも朝鮮に対する金子の思い入れは相当深いものであることがわかる。にも関わらず、その朝鮮での生活を述べた部分について、瀬戸内は詳しく触れなかった。

しかし、注目すべきは金子が朝鮮時代に出会った人々や出来事の代わりに、瀬戸内は朝鮮の「運命」を日朝修好条規（1876年）のころから歴史的に客観的に振り返って記載しているということだ。朝鮮が日本によって侵略されていく過程を日清戦争、日露戦争、そして日韓併合後の日本の苛酷な統治について詳しく述べている。東洋拓殖株式会社という農業の国策会社の創建によって、朝鮮の土地や家は次々と日本人の手に渡り、なすすべもなく奪われてしまう。結果、人々は日本人の小作人になるか、日本に朝鮮人労働者として渡ったのだった。1916年には東洋拓殖株式会社の所有土地は10万4280丁歩におよび、農耕地を奪われ、日本人の小作人に転落した農民は33万1748名に及んだという。そして、金子の手記には書かれていない3.1運動¹⁶について詳細に述べていることである。この独立運動を弾圧する日本兵らの暴虐ぶりを刻んだ塀の壁があるパゴダ公園を訪問した際には、今なお消えない朝鮮人の日本帝国主義への憎悪の念を表出している。瀬戸内は、日本と韓国との間の不幸な歴史を個人のレベルではなく、国家のレベルとして捉え、その不幸な関係は今もなお両国に影を落としていることを伝えているのだ。一方で、金子の滞在した英江を訪ね、朴烈の実家や金子の墓を訪ねた際の、金子の元同志たちが今も彼女を想い慟哭したことを書き留めている。この慟哭の声を『余白の春』の末尾にも再度登場させ、日本の土になることを拒み、朝鮮に文字通り骨を埋めることを選んだ金子と朝鮮人との今なお色濃く続く結びつきを示している。

このような叙述方法からは金子の体験を時代の

中に還元し、個人としての体験から当時の日朝関係に普遍化する意図が読み取れるといえるだろう。その中で、支配・被支配に基づく日朝両国関係を覆そうとする、国を超えた強い連帯があったことをこの慟哭の声は体现している。

【3】描かれなかった男

このように、金子自身が書いた自伝とは書き方や比重を変えながらも、自伝『何が私をかうさせたか』の構成要素の多くは『余白の春』の中に取り込まれている。だが、瀬戸内が触れなかったことがある。それは金子の初めての性体験についてである。

瀬戸内は、朝鮮から帰国後の金子と叔父の元栄との親交、瀬川という不良との交際や朝鮮人留学生との肉体関係、そして、クリスチャン斎藤との交際など、男女関係については、自伝や尋問調書を基にほぼ正確に記している。だが、その瀬戸内が触れていないのが、文子の初めての性体験についてではないか。

金子は浜松の実科女学校の裁縫専科で学んでいた頃、夏休みに入り、叔父の元栄に会いたくなって山梨に戻り塩山駅の近くの母の嫁ぎ先に立ち寄った際、駅で気分が悪くなって臥せっていた金子に声をかけてきた男を親類の男と勘違いし¹⁷、一緒に小料理屋に上がった彼女は男に襲われてしまう。その時の様子を自伝では次のように書いている。

あゝ何と云ふ悪魔で彼はあつたらう。振り拂ひ、振り拂ひ、矢を負つた獣物のやうに、私は夢中になつて狭い急な梯子段を駆けおりた。（中略）

この事を私は、今までついぞ一度も口外した事はなかつた。けれど、私の存在がもう何時この世から消え去るかも知れない今となつては、隠して置く必要もない。私の生活や思想や性格の上に大きな影響を及ぼしたであらうと思はれる何ものをも私は今、白日のうちにさらけ出して置かねばならぬ。それは皆に法官が私を見る一つの材料として必要であるより、もつと大きな真理の闡明のために絶対に必要なことだと思ふからである。¹⁸

この自伝執筆に於いて初めて告白され、金子の人間性に大きな影響を与えたというこの事実は、朝鮮から戻ってそう遠くはない時期に起きており、金子にとって初めての性体験であったと考えられる。しかし、それは金子の＜人違い＞により、男に力づくで凌辱されるという痛ましい事実でもあった。だから、金子は獄中に置かれたこの時まで秘し続けてきたのであろう。とすれば、それは彼女にとって大きな意味を持つ出来事であったに相違ない。しかし、瀬戸内は全く触れていない。

金子文子が関係を持った男たちは多かれ少なかれ、金子が納得して関係を持った男たちである。そこには性に対する憧れや本能的な性欲が存在しているにしても、また、男の性欲の対象として彼らが金子を求めただけの場合にしても、金子自身が自らの意思なくして蹂躪されたということとはなかった。しかし、この場合だけは異なっている。金子の＜人違い＞から不意に男の性暴力の餌食となるのである。男に捨てられたり、貧苦にあえぎながらも金子は自分の意思で人生を選択してきた。しかし、それが叶わなかった瞬間、それがこの時だったともいえる。ここには、性における力による支配・被支配の構図が成立する。この体験が根底にあったからこそ、異性との対等なパートナー関係構築を求めたともいえるのではないか。それは勿論、朴烈と出会うまでは叶わないものであった。朴烈との関係について金子は、後の被告人尋問調書の中で次のように語っていた。

私は朴に対し同志として同棲する事、運動の方面に於ては私が女性であると云ふ観念を除去すべき事、一方が思想的に墮落して権力者と握手する事が出来た場合には直ちに共同生活を解く事を宣言し相互は主義の爲めにする運動に協力する事を約して私等は同棲する事に決意したのであります¹⁹

このような性を超越した関係を目指すことになる原点には、この駅で出会った男との体験があったはずである。ゆえに、瀬戸内がこの点について触れていないことは不思議であり、また、残念でもある。

また、訊問調書には、

元栄は真実、私と結婚する意思を持っていま

せぬでした。

処女性を弄ぶ事を考えて居た外何物も無かったのであります。（中略）其の年の秋、退校して郷里に帰りますと、当時、元栄には別に愛人がありながら同人は私の処女性を破った上、私の父に対し私がお転婆であるが為寺に向かない事、他の男から私に宛てゝ手紙が来た等の事を口実に、破談を申し込んで来ました。（中略）叔父元栄は私の上に先づ権利だけを行使して、自らその義務を履行しない責任を私に負担させたのであります。²⁰

とある。また、自伝にも元栄の次のような言葉を書き留めている。

「いやなことさ。いくら美人でもありやもう処女ぢやないよ……」

さうだ、その頃、叔父の求めたものはたゞ処女だったのだ。そして私も亦、処女だったのだ。たゞそれだけの理由で私を彼の妻にすると云つたやうな馬鹿気たお伽噺を、馬鹿な私の父に約束したのだつた。²¹

元栄が「処女」のみを求めていたとすれば、金子との縁談を破棄した理由も納得がいく。金子が自分の勘違いが原因で襲われた男により処女ではなくなっていたとすれば、元栄が金子との関係を結ぶ中で、処女でなかった文子に幻滅し、縁談を断つたと考えるのが自然であろう。そして、金子自身の「処女」と「処女性」の微妙なことばの使い分けにも留意すべきである。元栄との性体験は金子にとっては好意を持っている相手に抱かれるという初めての性体験に等しいものであったが、元栄は即物的に金子との性体験を捉え、金子に処女としての価値を認めなかったのであろう。瀬戸内は、金子の元栄への心の傾斜は、「思春期の恋を恋する漠然とした本能の情緒」²²と見抜いている。と同時に、金子が元栄との情事の具体的な描写には一切ふれていないことに注目していて、「文子がいかにそれについて語るのを屈辱と思うほど、元栄には気を惹かれていたのではなかっただろうか。」²³と書いている。しかし、そうではないのではない。これまで追ってきたように、処女性を保っている、処女ではなくなっていた金子に対する幻滅や興味の減退をあからさまに示した元栄との屈

辱的な一夜だったのであり、金子は意識に上らせたくなかったと考えられる。しかし、この自伝はすべてをさらけ出すことを意図している。それによって、今まで隠していた男に蹂躪された過去を思わぬ形で金子はさらけ出した。このことにより、元栄との一夜の詳細には触れなくとも、前後の顛末からその実態が読者に想像される仕掛けを作っている。ただ、瀬戸内はそれに気づかなかった、または気付いてはいたが書かなかったのである。

【4】金子文子の末期の思想

瀬戸内は爆弾の入手と投擲をめぐる新山初代、金重漢、朴烈とのやり取りを裁判記録から再現している。²⁴ 注目すべきは証言のために呼び出された李小紅²⁵についての記述である。この李小紅に瀬戸内が注目し、ページを割いているのは興味深い。小紅はまだ二十歳そらの若さでありながら、尋問に動ぜず、検察官に対峙して一步も譲らない。瀬戸内は彼女の肝の坐った態度を高く評価している。金翰²⁶に対しても同様である。金翰はただ爆弾の取次ぎをしただけであり、使用目的は感知していないと嫌疑を一蹴した。これに対する検事の日本の政府に対して徹底的に反対するとは非常手段を執るより外には途が無い云々と云へる朴烈の言は、一般的に抽象的に朝鮮青年として常に云ふ処であると申し出たが、朝鮮青年は果して、其様な考えを持っているのか²⁷という質問への、金翰の答えは以下のものであった。

忌憚なく云へば苟くも朝鮮人と称せらるゝ者は死を以て日本人の前に立つてありませう。此朝鮮人の反抗的心理は、各自の性格と生活境地の社会的関係よりして、或は虚無主義、無政府主義、共産主義、或は民権主義としての形式に於て現はるゝでありませう。私は朝鮮人が日本国民に反抗することを以て永劫的の運命と確信して居る²⁸

このような日本の法廷における朴と金子以外の朝鮮人の発言を取り上げ構成している点は『余白の春』の特色と言えるだろう。ここには瀬戸内自身の「朝鮮」への親和的なまなざしが投影されてい

ると考えられる。²⁹ そして、その背景には徹底した尋問調書や公判準備調書の読み込みがあることは言うまでもない。圧巻なのは、これらの作業を通して、金子の最期に迫っていることだ。瀬戸内の解釈は次のようなものであった。

金子の小さな体には生まれながらにして恵まれた強肩な忍耐と、天賦の才能、同時にただ事ではない強烈な生命力が与えられていた。そして、「文子にとって生きるとは、学ぶことと闘うこと」³⁰であった。男たちを次々と捨てていき、傷痕を残さないのは彼らが金子よりはるかに生命力のボルテージが低く、官能の満足くらいしか与えることができなかったからではないか、というのである。瀬戸内は金子が求めたのは

自分の根底から自分を揺さぶり掴みとってくれる男の強烈な生命力、自分のおびただしい生命力に対等に太刀打ち出来るボルテージの高い生命力そのものではなかっただろうか。³¹

とする。一見やせ細った貧相な朴烈に金子が惹きつけられたのは、朴烈がこのような生命力を内包していると感じ取ったからに他ならない、というのだ。「生命力」の語を以て朴と金子を理解しようというのは瀬戸内らしい。

そして、瀬戸内は、金子が事件に朴烈と同質の重さで関係しようとしたという。朴烈より先に金子が爆弾使用の計画を自供し、続いて皇太子をねらったことや金翰や金重漢との関係についても、朴烈が金子にそれらすべてを相談して共謀した、と供述している点に着目しているのである。これは金子が取り調べに耐えられず自供したのではなく、金子の朴に対する想いがそうさせたのだと瀬戸内は見ている。そして、尋問を担当した立松判事が、金子の供述を朴烈に問いただし確認するという順序を取ったことも指摘し、問われた朴は金子のことを考え、慎重に答えていると見ている。例えば、朴は立松検事より、金子は最初から朴と相談して爆弾投擲の計画を立てたと述べ、金翰は朴に依頼され上海へ爆弾を取りに行くことを承諾したと陳述していることを聞く。すると、朴は、逆に爆弾投擲の目的と対象について二人がどのように述べているのかを問い、金子が皇太子殿下を

対象としたと答えていることを知り、そして、「文子が朴烈と共に死ぬことを最大の望みとしている心情」³²を察して次の言葉を語ったのだとする。

金子がそのように言っているとすれば、俺もその対象について決定的にいうことが出来る。

実は俺は日本の皇帝皇太子も爆弾投擲の最も重要な対象物としていたのだ³³

瀬戸内はこのように尋問調書を丁寧に読み比べ、そこから朴烈と同等に思考し行動したいという金子の願いを読み取っている。そして、一方の朴烈は、金子のことを想い、同等の罪が着せられてしまうことを避けようとしていたとする。つまり、金子は朴烈と同罪になることを願い、積極的に罪を作り上げるような発言をし、予審調書を通じて朴烈にも自分の考えを訴えて死に誘ったというのである。「文子のもっとも恐れていたものは、朴烈ひとりが死刑になり、自分の刑が朴烈と差別されて軽くなり、生き残ることであつた。」³⁴と瀬戸内は指摘する。換言すれば、金子の朴烈への想いが「大逆事件」の捏造を加速させていったということになる。そして、金子と朴の思惑が重なった結果、二人が爆弾を準備し皇太子に投げつけようとしたことが確定し、幸徳秋水事件、難波大祐事件に継ぐ「第三の大逆事件」として予審は終結する。

大審院の特別法廷での裁判に移行した後の第2回公判では、金子は金重漢との共謀は否定したものの、朴烈と同量の刑を受けて死ぬことを希望した。公判調書に添付された金子の書簡の末尾は次のようである。

私は朴を知つて居る。朴を愛して居る。彼に於ける凡ての過失と凡ての欠点とを超えて、私は朴を愛する。私は今、朴が私の上に及ぼした過誤の凡てを無条件に認める。そして朴の仲間に対しては云はう。私は此の事件がばかげて見えるのなら、どうか二人を嘲つてくれ。其れは二人の事なのだ。そしてお役人に対しては云はう。どうか二人と一緒にギロチンに放り上げてくれ。朴とともに死ぬるなら、私は満足しやう。して朴には云はう。よしんばお役人の宣告が二人を引き分けても、私は決してあなたを一人死なせては置かないつも

りです³⁵

瀬戸内はこれを金子の朴への愛を高らかに歌った「恋文」と考え、次のように書いている。

大審院の法廷を利用して、このように堂々とした恋文を、裁判官たちを前に置いて、恋人の面前で読み上げた女は、世界の中に探しても金子文子ひとりなのではないだろうか。³⁶

そして、瀬戸内は、金子が死を志向したのには金子なりの哲学があつたとして、板倉受命判事への最後のことばを次のように紹介している。

私がすでにニヒリズムを哲学だといった以上終いまで哲学的に解釈する。

即ち『生を否定する』という事は哲学的に成り立たない。何となれば生のみが一切現象の根本である。生を肯定してのみすべては定義を持ち得るから。さよう。生を否定した時それはすべてが無義である。否定から否定は生まれない。より強い肯定にのみ、より強い否定は生れる。即ちより強く生を肯定してこそそこにより強い生の否定と叛逆とは生まれるのである。だから私は生を肯定する。より強く肯定する。そして生を肯定するが故に、生を脅かそうとする一切の力に対して憤然と叛逆する。

そして、それ故に私の行為は正しい——と。³⁷

このように「生を肯定するゆえに、生を否定するものに対して叛逆する」という論理を持った金子がなぜ死を志向したのか。この問いに対する答えを、瀬戸内は文子のことばを次のように引用することで示している。

こういったらお役人さま方は、じゃなぜ自分の生を破壊しようとするような真似をしたのだ？ というだろう。私は答える——生きるとはただ動くという事じゃない。自分の意志で動くという事である。即ち行動は生きる事の全部ではない。そして単に生きるという事には何の意味もない。行為があつて初めて生きて居ると言える。したがって自分の意志で動いた時、それがよし肉体を破滅に導こうとそれは生の否定ではない。肯定である——と。³⁸

瀬戸内はここに於いて、文子は感傷的に朴烈との心中を図ったのではなく、冷静に哲学的に冷めた意識で死を志向したことを確信している。意志無くしての生よりも積極的な意志がそこに働き、意志を体現するために至りついた死である、と理解したのである。

この後、朴烈と金子文子には刑法第73条と爆発物取締規則3条にあたるとして死刑が判決された。しかし、そのわずか10日後、市ヶ谷刑務所の署長室で告げられたのは「特典ヲ以テ死刑ヲ無期懲役二減刑セラル」³⁹ という特赦であった。これを手にするや金子は破り捨てたという。そして、切望していた朴烈と共に死刑台に上るという願いは叶わず、朴烈は千葉刑務所に、金子は宇都宮刑務所栃木女囚支所に移され無期刑に服することとなる。

国家権力を否定することによって得た死刑は、文子の思想が選び取ったものであった。その栄光を奪われた文子が、国家権力によって与えられた生を否定し、自殺するしか自分の思想を貫く方法はないと判断しそれを決行したのは必然であった、と瀬戸内は説く。

しかし、本論冒頭で触れた李順愛氏は、裁判記録にある金子の言説と瀬戸内の『余白の春』にはズレがあり、「言われるようには、金子は朴に最後まで恋愛感情で引っぱられていた訳ではありません。」⁴⁰ と言う。李氏は1926年3月1日の結審の日の金子の最終陳述の中で「上村弁護人は、私共両人の関係が恋愛関係であると言われたが、私共の間には上村氏の言われる程の事はなかった事を一言して置く」⁴¹ という部分を見逃さず、先に瀬戸内が引用した書簡の末尾の部分は恋愛感情ではなく、「己の生命を間にはさんで権力と対峙している人間の、もっと素朴な反権力の連帯意識であったろう」⁴² と指摘している。そして、金子の思想は朴に順ずるのではなく、朴を凌駕したと見做し、「金子の場合は、自分を生きたらそこに死刑があったというような事だったろうと思います。」⁴³ と書いている。李氏の見解には傾聴すべきものがある。金子が朴を愛していたことは確かなことと思われるが、金子は恋愛感情に引っ張られ、朴との死を望んだのではない。時の権力の中核、

つまり、国家や天皇制と対峙し、それを否定した結果が死刑宣告だったのであろう。ただ、その反権力志向がなぜに「自死」という結果に結びついたのかについて李氏は言及していない。つまり、金子文子の末期の思想の内実、彼女の反権力志向がなぜ一人「死」を選んだのか、という点については詳しい考察はなされていないのである。

一方、瀬戸内晴美の語る金子文子の朴烈への愛、それは彼を一人では死なせない、共に死にたい、という思いであった。それと、生を肯定するゆえに生を迫害するものへの反逆として死を選択する、というこの二つの思想は金子文子に於いては同時に重なるべきもの、重なることによって完結するはずのものであった。だが、恩赦後、それは永遠に未完結のまま留置所内に放置されることになる。この時、金子文子は前者の想いを捨て、後者の思想を選択したのではなかったか。金子文子は、第一回公判準備手続きの中で

私がやろうとした事はテロであった。而し、其れは謂ゆるテロリズム運動ではない。ニヒリズムに根を置いた運動である。そして、謂ゆるテロリズム運動は、一つの政治運動であるがニヒリズム運動は哲学運動である——と私は思う⁴⁴

と書いている。瀬戸内が、金子が自身の反逆をテロリズムから区別し、思想運動と考え始めている、と指摘しているところだ。また、金子は杉田博士に向って、思想は変わる、大正12年9月、捕らえられた時点の自分の思想と、獄中に三年間も過ごした現在の思想は同一ではないといっている。反逆の思想は変わらなくとも、朴烈と共に死ぬという願いがかなえられなくとも、金子文子は自らの中でニヒリズムを死という形で完結させようとしたのではないか。そこにはもう触れることのできない朴烈を置いて、一人自らの思想に徹しようとする文子がいる。金子文子は朴烈と共にあることよりも、その一歩先を自らの意志で歩もうとしたのではなかったか。自らの意志で選び取ったたった一人の死。この死の瞬間に於いて、自己の虚無思想完結のために、金子文子は朴烈を超えて、一人旅立ったのである。瀬戸内は「未来になんの甘い幻想も抱いていない文子が信じていたのは現在

のこの時点における朴烈との愛だけであった。」という。しかし、朴烈と共に死ぬことを奪われ、国家権力によって与えられた生を否定し自殺するしか自分を貫く方法はない、と考えた金子文子には、朴烈への愛を超えて虚無主義を完結させた金子の真の精神の「自律」があったことを読み取るべきではないだろうか。

1926年2月26日の夜半に書いた公判調書に添付された金子文子の書簡には次のような言葉がある。

つまり私にして外の事情より見れば、全く他人の過失の犠牲になる話だ。が、そうと知りつつも、金翰兄との交渉中、なお私自身を省みりそうした計画を生む思想をもっているがゆえに、犠牲のようしている自分を救い出すこともできない。(中略) 私は自分がかく失敗したことについて、かれこれ悔ゆるものではありません。ただ、その失敗が自分の意志にもとづく失敗ではなかったことを、自分の前に限りなく恥じるものです。いわゆる『犠牲』を蔑みつつ、しかも私自身『犠牲になるのだ』というほどの自覚さえなしに犠牲になることがたまらなく恥ずかしいのです」(「二十六日夜中」)⁴⁵

ここには自己の明白な意識なしに「犠牲」となることへの甚だしい嫌悪が表出されている。ここには強烈な自己意識への信奉がある。自己の行為を自己が選択し、引き受けるということ。愛する朴を置いても成し遂げるべき自己主張。その完璧な実践が金子文子の自死だったのではないだろうか。それを裏付けるように金子は次のように書いている。

私が自分の行為に要求するすべては、自分から出て、自分に帰る。つまりピンからキリまで自分のため、自分を標準とする。したがって私が「正しい」という言葉を使うとき、それは完全に「自律的」な意味においてであることを断わるときです。⁴⁶

まさに、この「自律」の体得と実践が、朴をも置き去りにして、一人、金子が到達した「自死」への道を体現させたと考えるべきであろう。

【終わりに】

以上、検討してきたように、瀬戸内晴美の『余白の春』は、関東大震災に伴う朝鮮人虐殺や社会主義者の抹殺など、時代状況の中に金子文子を還元して描いている。そして、金子文子に関する丹念な文献資料の読解の上に、独自の实地踏査を加え書く方法が特徴的である。そこには「朝鮮」に対する瀬戸内の歴史的関心が感じられ、また朝鮮の人々と金子文子の思想的な連帯の強さが印象的に描かれている。ただ、金子の自伝の中で初めて明かされた性体験について触れていないことは問題があるのではないか。というのも、この経験は自己の意志を無視して結ばれた強制的異性関係であり、それは叔父・元栄との結婚が破談になることに結びつくなど、少なからず、金子文子の男性観や後の朴烈との全く対等な両性の同棲生活の構築、人間の絶対平等の思想など、金子の思想形成にも根源的に影響を与えていると思われるからだ。また、瀬戸内は朴烈への強烈な愛によって金子の末期の思想を解釈している点が特徴的であるが、この愛の過度な強調は、最終的に朴烈を置いて自死を選んだ、つまり、朴烈を超えた金子の屹立した自己の出現、または金子の虚無思想の完成という金子の到達した末期の思想が矮小化される恐れがある。獄死した思想家の激しい恋愛感情という、ある意味、美しくも陳腐なイメージに埋没してしまうことは避けねばならない。瀬戸内晴美が金子文子の死の意味に強い関心をもち、執筆したのがこの『余白の春』であるが、金子文子の末期の思想は、スチルネルらの虚無思想を金子がどのように受容し血肉化していったのか、という問題の探究なしには考えることはできないはずである。この点については稿を改めて論じたい。

【註】

- 1 1931年，春秋社
- 2 1972年，中央公論社。以下，本論における引用はこれによる。
- 3 註2のp.41
- 4 『女 天皇制 戦争』鈴木裕子，近藤和子編，1989年，オリジン出版センター，所収。
- 5 1970年，新潮社
- 6 『明治文学全集 96』1967年，筑摩書房
- 7 註2のp.54
- 8 註7と同じ
- 9 1927年，東京市
- 10 1957年，中島健蔵，岩波書店
- 11 1926・1927年，横浜市役所
- 12 註2のp.26
- 13 註2のp.26
- 14 註2のp.28
- 15 註2のp.68
- 16 『何が私をかうさせたか』の中に3.1運動について記載がないのは、『何が私をかうさせたか』の原稿が栗原一男に宅下げされる時，検閲によって削除された可能性もある。
- 17 『金子ふみ子獄中手記 何が私をかうさせたか』，1972年，黒色戦線社，のp.238には次のようにある。＜私は人違ひをして居たのだつた。朝鮮から帰つて来た当座，祖母につれられて小松屋と云ふ一番小さい叔母の婚家さきにお客に行つたことがあつたが，その叔母の義弟にあたる男をこの男だと思ひ込むで居たのだつた。ところが，実は此の男は叔母の義弟ではなくて，その時私が，近所の家に風呂をもらひに行つて会つた事のある男のうちの一人だつたのである。＞つまり，文子は体調不良により，親戚の男性と顔を見たことのある程度の男を人違いし，小料理屋の二階について行き，男の毒牙にかかつてしまったのである。もし，この時，文子の体調が万全で意識がしっかりしていれば，このような勘違いは起きず，小料理屋の二階にはついていかなかったのではないかと考えられる。
- 18 註17のp.238
- 19 『朴烈・金子ふみ子裁判記録』1977年，黒色戦線社，p.20，第4回訊問調書。読みやすくするため，漢字・カタカナ文を漢字かな交じり文に書き換えた。
- 20 『朴烈・金子ふみ子裁判記録』1977年，黒色戦線社，p.12，第2回訊問調書。読みやすくするため，漢字・カタカナ文を漢字かな交じり文に書き換えた。
- 21 註17のpp.227-228
- 22 註2のp.132
- 23 註2のp.134
- 24 金子は，新山初代が朴烈は他人に爆弾を投げさせて自分は逃げるつもりだと考え，朴烈に悪感情を持っていることを知り，その誤解を解こうとする。つまり，金子は，新山に上海とは連絡がついていて暗号の手紙のやりとりをしているということ，金重漢や新山を利用するつもりはないこと，爆弾が入手できれば金子が投擲するということを以前語ったことがあった。それを聞いていた新山が取り調べの中で，金翰と朴烈が爆弾について連絡を取っていたことを口走ってしまったのである。その結果，金翰と小紅を事件に巻き込むことになり，この二人が証人として呼び出されることになった。これは，すべて金子文子が初代の朴烈に対する誤解を解こうと金翰との手紙のやり取りについて話したことが原因である，と瀬戸内は文子を断罪している。
- 25 李小紅は京城の妓生。13才で他家に養われ，16歳で京城で官妓となる。恋人の影響で社会主義思想を持つようになり，金翰や朴烈を知り，朴烈の手紙を金翰に取り次いだりした。証人として召喚された時は20才であった。
- 26 金翰は当時38歳。朝鮮では無産者同盟会の委員をしていた。上海の義烈団長金元鳳の依頼で上海からの爆弾の授受と配分を行っていた。
- 27 註19のp.138。読みやすくするため，漢字・カタカナ文を漢字かな交じり文に書き換えた。
- 28 註19のpp.138-139。読みやすくするため，漢字・カタカナ文を漢字かな交じり文に書き換えた。
- 29 本論【2】瀬戸内晴美の朝鮮の描き方でも触れたとおり，瀬戸内晴美は日本と朝鮮の歴史を本文中で説明する際，＜それにしても朝鮮とい

う国土は何という悲運を背負っているのだろうか。＞（註 2， p.194）と述べ、＜日本が朝鮮を侵略していった過程＞（同上）を中心に、＜自力で国土を守る能力のない哀れな朝鮮＞（註 2， p.197）、＜韓国はすでに日本の完全な被保護国となっていたが、日本はそれだけではあきたらず、更に徹底的に韓国を自国の支配下に屈服させずにはおかなかった。＞（註 2， p.198）、＜一八七六年の江華島条約以来、条約を結ぶ度に、その条件は、日本の侵略意図を露骨に表してきている。ここに至っては、もう韓国は、事実上の日本の植民地と化している。軍隊を失い、司法権を奪われ、羽も足もむしりとられた瀕死の窮鳥韓国に日本は最後のとどめを刺すことをおこなった。＞（註 2， p.201）、＜日本の言語に絶した弾圧政治の黒い歴史の頁＞（註 2， p.204）というように日韓併合の現実を韓国側の視点から述べ、深い同情を寄せている。また、取材の際に出会った二人の朝鮮人女性について＜どうしても二人が自分と異なる人種の人であるとは思えなくなってきた。皮膚の色も髪の色も、顔立も、そして軀つきも、日本人と朝鮮人はどうしてよくもこうまで似ているのだろうか。＞（註 2， p.211）と朝鮮人と日本人とが酷似していると述べ、親近感を示している。

³⁰ 註 2 の p.285

³¹ 註30と同じ

³² 註2の p.290

³³ 註32と同じ

³⁴ 註 2 の p.301

³⁵ 註17の p.748

³⁶ 註 2 の pp.300-301

³⁷ 註 2 の pp.301-302

³⁸ 註 2 の p.302

³⁹ 註19の p.791

⁴⁰ 註 4 の pp.70-71

⁴¹ 註 4 の p.71

⁴² 註41と同じ

⁴³ 註 4 の p.81

⁴⁴ 註19の p.588

⁴⁵ 註19の pp.743-744。但し金子文子の自筆文が

判読不明の部分があるため『増補新版 金子文子 わたしはわたし自身を生きる』鈴木裕子編、2013年、梨の木舎 p.353を引用した。

⁴⁶ 註19の p.740。但し金子文子の自筆文が判読不明の部分があるため註45の p.351を引用した。

【主要参考文献】

瀬戸内晴美『余白の春』中央公論社、1972年

金子文子『何がわたしをかうさせたか』春秋社、1931年

金子文子『金子ふみ子獄中手記 何が私をかうさせたか』黒色戦線社、1972年

『増補新版 金子文子 わたしはわたし自身を生きる』梨の木舎、2013年

『朴烈・金子ふみ子裁判記録』黒色戦線社、1977年

鈴木裕子、近藤和子編『女 天皇制 戦争』オリジン出版センター、1989年

キム・ビョラ『常盤の木 金子文子と朴烈の愛』同時代社、2018年

後藤守彦『只、意志あらば 植民地朝鮮と連帯した日本人』2010年、日本経済評論社

『明治文学全集 96』筑摩書房、1967年

朴慶植『朝鮮三・一独立運動』平凡社、1976年

朴慶植『天皇制国家と在日朝鮮人』社会評論社、1986年

金廣植「金子文子の思想形成に関する研究」『日朝関係史論集』新幹社、2003年

山田昭次『金子文子 自己・天皇制国家・朝鮮人』影書房、1996年

山田昭次「金子文子と吉野作造の朝鮮観」『植民地支配、戦争、戦後の責任』創史社2005年

日本大学国際関係学部研究年報に関する内規

平成21年 3 月18日制定
平成21年 4 月 1 日施行
平成24年 3 月 7 日改正
平成24年 4 月 1 日施行

(趣 旨)

第1条 この内規は、日本大学国際関係学部が発行する国際関係学部研究年報（以下研究年報という）に関する必要事項を定める。

(発 行)

第2条 研究年報の発行者は、国際関係学部長とする。

2 研究年報は、毎年2月に発行するものとする。ただし、研究委員会が必要と認めたときは、この限りでない。

(編集委員会)

第3条 研究委員会に、編集委員会を置く。

2 編集委員会は、研究年報の編集・発行業務を行う。

3 編集委員会は、研究委員会委員をもって構成する。

4 編集委員会委員長は、研究委員会委員長とし、編集委員会副委員長は、研究委員会副委員長とする。

(投稿資格)

第4条 研究年報に投稿することのできる者は、国際関係学部及び短期大学部（三島校舎）の専任教員とする。

2 共同執筆の場合、主たる執筆者は専任教員とする。ただし、共著者には他機関の者を含むことができる。

3 助手については、指導教授または関連分野の教授の推薦により、投稿することができる。

(原稿の種別)

第5条 研究年報に掲載する原稿は、学術研究に関する研究成果等とし、原稿の種別は、論文、研究ノート、資料、学会動向、その他編集委員会が認めたものとする。

(投稿数)

第6条 投稿は1号につき1人1編とする。

(使用言語)

第7条 使用言語は次のとおりとする。

① 日本語

② 英語

③ 英語以外の外国語で編集委員会が認めたもの

(字数の制限)

第8条 原稿は字数16,000字以内（A4で10頁程度）とする。

2 前項の制限を超える原稿は、編集委員会が認めた場合に限り採択する。

(原稿の作成)

第9条 原稿の作成は、別に定める「研究年報執筆要項」による。

2 原稿はパソコンで作成したものとする。

(禁止事項)

第10条 原稿は未発表のものとし、他誌への二重投稿をしてはならない。

(原稿の提出)

第11条 投稿者は、印字原稿(図表、写真を含む)と当該原稿のデジタルデータ(原則として図表、写真を含む)を保存した電子媒体及び所定の「研究年報掲載論文提出票」を添付し、研究事務課に提出する。

(提出期限)

第12条 原稿の提出期限は、毎年10月10日とする。

2 前項の提出日が祝日又は日曜日に当たる場合は、その翌日に繰り下げる。

(審査)

第13条 投稿原稿は、別に定める審査要項に基づき編集委員会において審査する。

2 論文の審査は、受理した原稿1本につき、学部外者1名、学部内者1名の論文審査員を編集委員会が選任し、審査を委託する。

3 研究ノート、資料、学会動向、その他の審査は、編集委員会委員のうちから選任された審査員1名が、審査する。ただし、投稿原稿の専門領域に応じて、編集委員会委員以外の審査員1名を選任し、審査を委託することができる。

4 審査員は、自ら投稿した論文等について審査することができない。

5 審査員は、当該審査結果について、所定の「審査結果報告書」を作成し、編集委員会に報告する。

6 編集委員会は、前項の報告に基づき、投稿原稿掲載の可否について審議し、決定するものとする。

(校正)

第14条 掲載が決定した投稿原稿の執筆者校正は、二校までとし、内容、文章の訂正はできない。

(別刷の贈呈)

第15条 研究年報の別刷は、1原稿につき30部を投稿者に贈呈する。

2 前項の部数を超えて別刷を希望する場合の経費は、投稿者の負担とする。

(著作権)

第16条 研究年報に掲載された論文等の著作権は、各執筆者に帰属する。ただし、論文等を出版又は転載するときは、編集委員長に届け出るとともに、日本大学国際関係学部研究年報からの転載であることを付記しなければならない。

(電子化及び公開)

第17条 研究年報に掲載された論文等は原則として電子化(PDF化)し、本学部のホームページを通じてWEB上で公開する。

附 則

1 この内規は、平成24年4月1日から施行する。

2 従前の『研究年報』編集・執筆要項は廃止する。

国際関係学部研究年報執筆要項

平成21年 3 月 18 日制定
平成21年 4 月 1 日施行
平成24年 3 月 7 日改正
平成24年 4 月 1 日施行

- 1 原稿は完全原稿とし、締切日を厳守してください。また、翻訳原稿については、必ず原著者の許可を得てください。
- 2 原稿の種別は次のとおりとします。
 - ① (1) 論文 (2) 研究ノート (3) 資料 (4) 学会動向
 - ② (1) ～ (4) 以外のもので編集委員会が認めたもの
- 3 本文は常用漢字、現代かなづかいとし、学術上で必要な場合においては、その分野で標準とされている漢字を用いてください。数字はアラビア数字を用い、外来語はカタカナ書きとしてください。
- 4 原稿は、原則として横書きで、字数16,000字以内（A 4 で10頁程度）で次の書式で作成してください。
 - ① 日本文 22字×42行× 2 段
 - ② 英文 50字×42行× 1 段
- 5 原稿はパソコンを使用し、A 4 の印字原稿(図表、写真を含む)及びデジタル原稿（原則として図表、写真を含む）に別紙「研究年報掲載論文提出票」を添付し、研究事務課に提出してください。
- 6 図、表、写真は、パソコンを使用して作成しデジタル原稿に含めて提出してください。
 - ① 図、表、写真は著者がオリジナルに作成したものを使用してください。
 - ② 図、表、写真は本文中の該当箇所に挿入・添付してください。
 - ③ 図、表、写真にはそれぞれ、図－1、表－1、写真－1 などのように通し番号をつけ、タイトルをつけてください。
 - ④ タイトルは、表の場合は表の上に、図・写真の場合は下につけてください。
 - ⑤ 図、表、写真は原則として1色とします。カラーページが必要であれば使用できるものとしますが、費用は著者の実費負担とします。
- 7 英語の表題とアブストラクト(約200語)を添付してください。本文が英文の場合は、日本語アブストラクト(約400語)を添付してください。
- 8 引用文献は、本文中に番号を当該個所の右肩につけ、本文の終りの引用文献の項に番号順に、以下の形式に従って記述してください。ただし、特別の専門分野によっては、その専門誌の記述方法に従ってください。
 - ① 原著論文を雑誌から引用する場合
番号、著書名、論文表題、掲載雑誌名、巻数、号数（号数は括弧に入れる）、頁数（始頁、終頁）、発行年（西暦）の順に記述してください。
 - ② 単行本から引用する場合
番号、著書または編者名、書名、版次、章名、引用頁、発行所、その他、所在地、発行年（西暦）の順に記述してください。
 - ③ 文章を他の文献から引用する場合
原典とそれを引用した文献および引用頁を明らかにして〔 〕に入れて〔・・・より引用〕と明記してください。

9 参考文献は文末にまとめてください。表記については、8の引用文献の表記を参照してください。

具体的な引用方法については、それぞれの国や学問分野によって違いもありますが、以下の例示をひとつの基準として参考にしてください。

(1) 日本語文献引用の例示

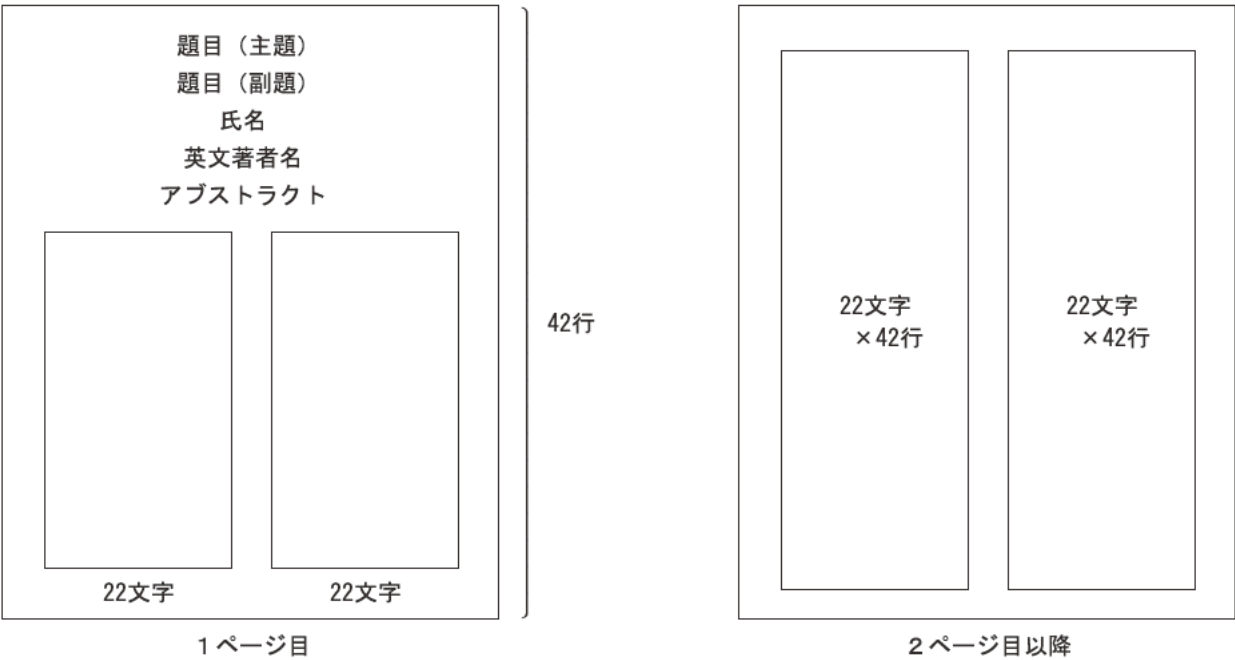
四宮和夫『民法総則』(昭和61年) 125頁
末弘厳太郎「物権的請求権の理論の再検討」法律時報〔または法時〕
11巻5号(昭和14年1頁)

すでに引用した文献を再び引用する場合には、
四宮・前掲書123頁または四宮・前掲『総則』123頁
末弘・前掲論文15頁または末弘・前掲「再検討」15頁

(2) 英語等文献引用の例示

Charles Alan Wright, *Law of Federal Courts*, 306 (2d ed. 1970)
Dieter Medicus, *Bürgerliches Recht*, 15. Aufl., 1991
Georges Vedel, *Droit administratif*, 5e ed., 1969
Harlan Morse Brake, "Conglomerate Mergers and the Antitrust Laws", 73 *Columbia Law Review*〔または *Colum. L. Rev.*〕555 (1973)
Alexander Hollerbach, "Zu Leben und Werk Heinrich Triepels.", *Archiv des öffentlichen Rechts*〔または *AoR*〕91 (1966), S. 537 ff.
Michel Villey, "Préface historique à l'étude des notions de contrat", *Archives de Philosophie du Droit*〔または *APD*〕13 (1968), p. 10.
すでに引用した文献を再び引用する場合には、
Wright, *op. cit.*, pp. 226-228.
Medicus, a. a. O., a. 150.
Vedel, *op. cit.*, p. 202.
ただし、直前の注に掲げた文献の同一箇所を引用するときは、*Ibid.* 他の頁を引用するときは、*Ibid.*,p.36

日本文 刷り上り後のイメージ



執筆者一覧

(掲載順)

小田切文洋	教 授	日中比較文学
安元 隆子	教 授	日本近代文学

国際関係学部研究年報 第40集

平成31年 2月28日 印刷

平成31年 2月28日 発行

発 行 者 渡 邊 武一郎

発 行 所 日 本 大 学 国 際 関 係 学 部

〒411-8555 静岡県三島市文教町 2丁目31番145号

電 話 055-980-0808

印 刷 所 株 式 会 社 ア プ ラ イ ズ

〒430-0856 静岡県浜松市中区中島 3-17-25

ISSN 0388—4279

JOURNAL OF THE COLLEGE OF
INTERNATIONAL RELATIONS

No.40

2 0 1 9

College of International Relations

Nihon University, Japan